真鍮製スプーン　フランス　15世紀　長13.7cm

赤木明登

塗師

骨董好きの一〇人に九人はセオリーどおりのものしか見ていない気がします。茶の湯も民藝も古道具もそう。利休や柳宗悦や坂田和實さんが評価したものを追いかけている。日本人にかぎらず、人間はみなセオリーが好きだからとうぜんとも思いますが、骨董のおもしろさはたぶんそこにはなくて、もっと気ままで、いいかげんで、振り幅も大きくものを見てゆくなかで、美しさの芯が見えてくることがある。

その芯ということで考えれば、僕は古いものも新しいものもおなじだと思っています。生命の本質はＤＮＡで、個体はそれを次代へ継承させる乗り物にすぎないといわれますが、たとえば僕がつくる器も室町の根来も、何千年もまえからつづく大きな流れのなかにあり、その意味ではつながっている。別個のものではない。いまは眼利きという言葉を、古物の時代や作者、真贋がわかる人という意味でつかっていますが、僕はその「流れ」が見えている人のことだと思います。

このあいだ腐敗と腐蝕のことを考えていました。腐ることと錆びること。その力は強大で、僕たちの文明はずっと闘ってきた。それは人工物を自然にもどそうとする力で、文明社会においては悪だけれど、自然環境においては再生をうながす循環であり、しかも美しい。人間がつくったものには、たえずそうした自然の力が作用していて、それを感受することと、古物を愛玩することは、じつはとても近いことなのかもしれません。

Akito Akagi